

植調試験地だより

鹿児島第一試験地

財団法人日本植物調節剤研究協会 鹿児島第一試験地 主任 加治屋伸章

はじめに

鹿児島第一試験地は普通期水稻に対する試験を目的として、鹿児島市中山町の現在地に平成元年に設立されました。前任者の湯田保彦さんが県農業試験場を退職されると同時に発足し、私で2代目となります。

中山町はかつては鹿児島市有数の水田地帯でしたが、近年都市化が進み次第に水田面積が減少しつつあります。試験地のあるところは、中山町の少し奥まった通称「滝ノ下」といわれるかつてはホテルの名所として知られた水のきれいなところ です。

試験地は、来年3月に金峰町に移転することが決まっている県農場試験場から約2km、JR指宿枕崎線谷山駅から約4km、九州自動車道に接続している指宿スカイライン中山インターから1kmりのところにあり、比較的交通の便には恵まれております。

それでは試験地の概要や試験のやり方、日頃考えていること等について簡単にご紹介したいと思います。

試験地の概要

試験水田は3筆で合計面積は約30アールあり、この他に建物敷地として3アールの畑地を借り上げております。

水田はすべてコンクリート畦畔になっていますが、これは試験地発足時に工事を行ったものです。

試験地の土壌は南九州特有の「シラス」を母材とした砂壤土です。このシラス土壌は葉害が非常にしやすい土壌であるため、鹿児島第一試験地は全試験地の中で最も葉害の多い試験地の一つとなっています。

事務所兼作業舎は発足時から3回ほど増改築していますが、非常に手狭で現在ではぎりぎりの状態で使用しています。もう少し思い切って大きくしておけばと後悔しているところです。



写真-1 事務所兼作業舎 (約40㎡)

用水は河川水を使用していますが、前述の通り地域の上流部に位置し、非常にきれいな水が豊富にあります。水がきれいなため逆に藻類の発生が少なく、藻類に関しては全く試験になりません。

田植及び試験区の作成

田植及び枠入れは、言うまでもなく適2試験の中で最も労力が集中する作業です。

当試験地では、鹿児島第二の高田さんはじめ、

九州地域に支店のある供試薬剤メーカーの方々に手伝ってもらい田植え・区割りを行っています。この方々の手助けなしには仕事をこなせない様な状態であり、非常に感謝しております。

2年前よりこれまでの作業を下記のように変更しました。このことにより、かなり作業が楽になり試験精度も向上したと考えております。

1) 機械植えの実施

試験水田が3筆に分かれ合計約30アール弱と手狭な為、機械植えすると思うような区割りが出来にくいとの理由で、試験地設置以来15年間手植えで試験を実施してきました。しかし労力がかかる上、田植えする人の個人差が大きく、その後の生育に及ぼす影響も大きいため、機械植に変えました。

2) U字給水パイプの導入

以前は水路側は杉板を用い水の取り入れ口を作っており、板の割れ目などより水漏れの心配がありました。U字パイプを導入し、先端にL字や直の継ぎ手を付けることにより、以前よりも作業が楽になり精度も向上したと考えています。

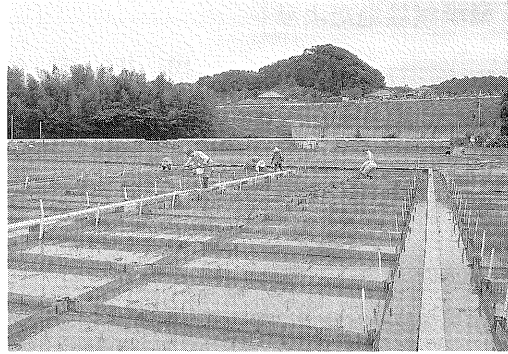
3) 土留め板の設置

試験区内の水出入りを防ぐ土留めは、福岡試験地より資材の提供を受けた仕切り板を設置したところ、ほぼ完璧に水の出入りを防止できるようになりました。

4) 通路のアルミ板使用

これまでは湯田さんが作っていた「木製の足場」と「ブロック」を使っていましたが、非常に重く重労働になっていました。室内作業用の軽量アルミ板の導入により作業が非常に楽になります。もう少し早く導入すれば良かったと思っています。

これ等は全て、3年ほど前の植調の研修会で



写真－2 試験区の枠入れ風景

見聞きしたことを取り入れたもので「研修会」の有難さを感じているところです。

研修会を実施する事務局は何かと大変でしょうが、他の試験地の人と話したり、試験現場を見るということは何かと得るものが多いものです。これからも「研修会」を開催していただき、出来るだけ参加していきたいと考えております。

県内の普通期水稻地帯を見て思うこと

この数年、植調事務局から「水田雑草の発生の実態調査」や「水管理実態調査」の依頼があり、県内の主な普通期作地帯を回った時の感想です。

1) 田んぼに人の姿が極めて少ない

技術の進歩で人手がかからなくなったという事もありますが、米価の相対的な低下が農家の生産意欲を削いでいる点も見逃せません。農家と話をしても昔ほど技術的なことに関心を示さなくなっているように感じます。水管理等は掛け流しがかなり多く、特に装置化された水田ではその割合が高いような気がします。

2) ジャンボタニシの侵入地域の拡大

鹿児島県では侵入地域が年々確実に拡大しています。侵入地域は初期・中期の超浅水管理が一般的で、直接的な被害は勿論、除草剤の効果

の低下、域外流出など環境に対する悪影響も心配されます。

3) 水田雑草の主役はノビエ・コナギである

雑草防除が適切に出来なかった水田ではノビエ・コナギの発生が多く、我々が子供の頃の50年前とほとんど変わっていない感じがします。特にノビエは収穫時1枚の田んぼに十数本もあれば非常に目立つため、人目を気にする人も多いようです。

4) クログワイの発生地域が増加

コウキヤガラ等は極限られた地域での発生ですが、クログワイは各地でかなり発生している水田が見受けられるようになってきました。今後はその防除対策が問題となってくるであろう。

試験地における課題・問題点

1) 雇用している人の高齢化

試験地開設時からほぼ同じ人達を雇用しているが、今では最も若い人で60歳代となっていました。近辺は都市化が進み、田んぼでの作業をするような人がおらず(市のシルバー人材センターも田んぼでの作業を想定していない)、必要な人員確保が困難になってきています。

2) ついにジャンボタニシの侵入はじまる

ジャンボタニシが試験地に年々迫ってきていたが、今年になり排水路から上ってくるジャン



写真-3 試験の実施状況

ボタニシが急激に増えてきました。来年度はかなりの侵入があると思われますが、効果的な防除手段がない現在、今後試験を実施していく上で大きな負担になりそうです。

3) 体系処理(中後期)試験への対応

今年から急に増加した中・後期除草剤は、鹿児島県ではほとんど使用されていないうえ、田植後30日～40日の処理も設定されています。暖地の普通期水稻の生育パターンからみて、田植後30日以降の処理は実用面から見て問題があり、植調事務局との打ち合わせが必要と考えています。

おわりに

現在、着任してから4回目となる収穫作業を行っていますがこの間、試験実施に当たり失敗したり後悔したことがかなりあります。我々は精度の高い試験が求められており、これからも植調事務局、研究所やその他関係諸氏の指導、助言を受けながらより確実な試験を行っていきたいと考えています。

今後ともよろしくお願いいたします。

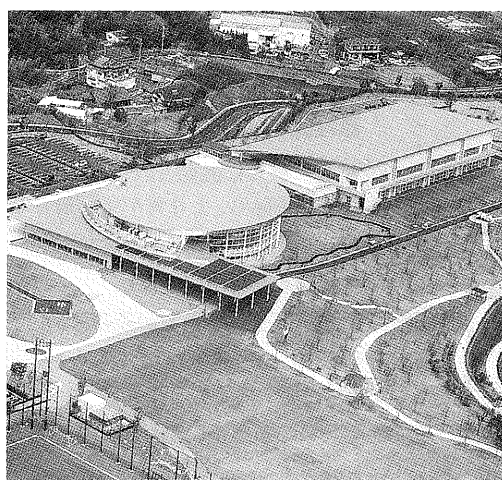


写真-4 鹿児島ふれあいスポーツランド
(中山インター隣接地)